様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２３年５月１６日現在

機関番号：３２６７０
研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：2008～2012
課題番号：２０３２０１０７
研究課題名（和文）　顕密・真宗聖教による中世仏教の統合的な教学構造と「仏法」観に関する研究
研究課題名（英文）　Study on Buddhist view of the teaching and study of medieval Buddhist scriptures.
研究代表者
永村　眞（NAGAMURA MAKOTO）
日本女子大学・文学部・教授
研究者番号：４０１０７４７０

研究分野：人文
科研費の分科・細目：史学・日本史
キーワード：仏法観、聖教、三論宗、真言宗、真宗

１．研究計画の概要
中世の寺院社会における多彩な教学活動の成果である「聖教」を素材として、その基底にある「仏法」観を明らかにし、その上で中世仏教の教学構造の解明を試みることを研究目的とする。
具体的には、奈良東大寺に伝来する顕教聖教（三論・倶舎）、京都醍醐寺に伝わる真言聖教（事相・教相）、そして伊勢専照寺等に伝わる真宗（宗乗）聖教と余乗聖教等を調査・蒐集し、多彩な形式・内容をもつ聖教の生成と機能について検討を加える。特に諸「宗」の聖教を、その宗教的機能を指標に一定の分類を施し、性格の類似した聖教に記される教学的な内容から、諸「宗」において「仏法」が如何にとらえられ受容されたかを明らかにしたいと考えている。
顕宗聖教では、「宗」という枠を越えた論義の問題を通して、問答における論点の対象に注目している。
真言聖教では、特に事相と教相との対象を意識し、聖教の記述に内在する両者の関係について、意識的に検討する。
さらに真宗諸寺に伝来した真宗聖教（宗乗）と余乗（法相・華厳・天台・真言・因明）の聖教の機能的対照に注目し、真宗教学にとって余乗が如何なる存在意義をもったのかを通して、中世以降における顕密教学の評価を明らかにしたい。

２．研究の進捗状況
　研究活動の中心は、史料調査とそのデータベース化、そして蒐集史料の検討作業の二つである。
　まず史料調査であるが、所蔵者との協議のもとにで、年間に調査時期を定め、確実に史料蒐集を進めている。東大寺・専照寺では年間に一回、醍醐寺では年間に二回以上、毎回一週間程度の調査において二百～三百枚の調書を作成し、併行してその画像撮影を実施している。
　調査の成果として蓄積された調書と撮影画像のデータは、東大寺・専照寺・醍醐寺を中心として、逐次データベース化が進められている。また調査が終了した史料群については、そのまとまりごとに目録の編集しており、例えば『護国寺日記目録』は既に刊行して、関係機関に配布している。今後も蓄積されたデータを活用して、調査実施した諸寺に目録を提供する予定である。
　また研究活動の当初より、史料調査と併行して主に蒐集史料を素材とする研究会の開催を継続しており、その研究活動の成果も着実に蓄積されている。その成果の一端は、平成２１年度に開催したシンポジウム「醍醐寺の歴史と文化財」の場で報告された。
　ただ予定していた調査史料のみでは、当初の研究目的に接近することが不十分と判断される分野について、補足的に調査対象を追加して、研究素材の補完を図っている。

３．現在までの達成度
達成度としては、「おおむね順調に進展している」と自己評価する。
従来は、史料的・歴史的・教学的な活用が不十分であった各宗の聖教について、宗に固有の形式・内容を踏まえ、活用された場を意識しながら、その内容の解析を進めている。達成度を明確な数値で示すことは困難であるが、内容的に現状を以下略記する。
特に真言聖教における事相が教相と一体で相承されるなかで、鎌倉後期を境にして両者

の分離が進む経緯が、聖教の検討作業から明らかになった。
また真宗において宗乗を補完するための余乗の聖教への強いこだわりが、少なくとも中世末から生まれつつあった現状が確認された。今後は余乗が如何に宗乗を、教学的に補完し得たのかを明らかにしたい。
ただ顕宗聖教については、現在は三論宗聖教が調査の中心であり、他宗との比較を素材的に十分にできない現状である。早期に他の聖教（特に倶舎、華厳）の聖教、特に論義草の調査に進みたいと考えている。
また研究の中核になる仏法観について、諸「宗」の聖教にうかがわれる「仏法」の認識については、次第に明らかになりつつあるが、この「宗」という枠を越えた「仏法」観のあり方を如何に聖教から解明するか、さらに「仏法」観を基底にした中世仏教を支える教学構造のあり方を模索することが、今後も意識的に関わらねばならぬ大きな課題となっている。

４．今後の研究の推進方策

現状として不足している研究素材の補足調査が不可欠である。特に東大寺における三論宗以外の顕宗聖教の調査、真言聖教では、事相を教学的に裏付ける教相のあり方を、醍醐寺と極めて近接した関係をもつ東寺・根来寺の教相聖教に注目して蒐集する。また真宗宗乗と余乗の聖教については、時代を如何に広げて調査するかを、当面の課題としたい。

これらの聖教を踏まえて、如何に「仏法」観を理解するかが、今後の研究会における重要な検討課題となる。意識的にこの課題について、報告・討論を重ねたいと考えている。

５．　代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）

①永村眞「密教における「相承」の意義」（「密教学研究」43、p. 29-45、2011 年、査読無）
②永村眞「遍智院成賢の教説と聖教－聞書・口決・抄物－」（『醍醐寺の歴史と文化財』p211-240、2011 年、勉誠出版刊、査読無）
③永村眞「醍醐寺文化財統合システムの機能と課題」（『醍醐寺の歴史と文化財』p. 192-209、2011 年、勉誠出版刊、査読無）
④永村眞「真宗と余乗－存覚の著述を通して－」（「日本女子大学大学院文学研究科紀要」16、p. 73-86、2010 年、査読無）
⑤永村眞「護国寺の仏法と法会」（『護国寺とぶんきょう』p. 22-27、2009 年、文京区刊、査読無）
⑥永村眞「「僧行」への視線－「古事談」編纂の一齣－」（『「古事談」を読み解く』p. 218-236、2009 年、笠間書店刊、査読無）
⑦永村眞「消息と聖教の筆跡論－主に親鸞・蓮如の筆跡を通して－」（『文化財と古文書学－筆跡論－』p. 159-190、2009 年、勉誠出版刊、査読無）

〔学会発表〕（計４件）

①永村眞「密教における「相承」の意義―歴史学の立場から－」（日本密教学会大会、2010 年 10 月 21 日、種智院大学）
②永村眞「親鸞の東国教化－下野高田門徒に注目して－」（栃木県歴史文化研究会大会、2010 年 8 月 28 日、栃木県立博物館）
③永村眞「伊予国国分寺文書の特質－主に連券と書継案文を通して－」（四国中世史研究会大会、2010 年 8 月 21 日、香川県立文書館）
④永村眞「遍智院成賢の聖教」（シンポジウム「醍醐寺の歴史と文化財」2009 年 11 月 14・15 日、日本女子大学）

〔図書〕（計１件）

永村眞『護国寺日記目録』（共編、p. 1-61、2010 年、日本女子大学刊）